

ルーラルツーリズムの推進組織のあり方に関する一考察

五艘みどり（帝京大学）

Keyword：ルーラルツーリズム、推進組織、アグリツーリズム、イタリア、南チロル

1. はじめに

先進国の農村の多くは、農業の国際間競争の激化や都市への人口流出という問題を抱えている。そこで、農業所得の補填や、農村のコミュニティの維持を目的として、ルーラルツーリズムを導入する動きが盛んである。我が国のルーラルツーリズムは、「グリーンツーリズム」として1990年代以降に積極的に導入を進める地域が登場し、主として高齢化する農村住民の生きがい創出を目的に、農家民宿に教育旅行を受け入れる形で発展した。登場して20年が経過した農家民宿の多くは、世代交代の時期を迎えているが、教育旅行を顧客とする農家民宿の収益性は低く、次世代が農家民宿の継承に消極的になっている所も少なくない。このままでは次世代が農家民宿のみならず、農業も継承しない可能性があり、農村が抱えていた当初の問題は解決しない。今後は収益性の高い農家民宿に刷新する必要があるが、農家単体では技術的に限界があるため、地域における推進組織のあり方が重要になると考えられる。こうした背景から、本研究はルーラルツーリズムで著しい成長を続けるイタリア南チロルに注目し、ルーラルツーリズムの推進組織や関連組織のあり方について明らかにすることを目的とする。南チロルは、気候風土や地方分権という違いはあるが、農業が家族経営であること、農地が中山間地域に立地することから、日本の農村と類似があり、我が国の将来的なルーラルツーリズムの運営に対し、興味深い示唆を与えることが可能であると考えている。

本論では、2017-2018年に計5回に亘り、南チロルのルーラルツーリズム関連組織（南チロル農民連合、南チロル農村女性協会、南チロル観光協会）や個人（農家民宿であるアグリツーリズムの経営者）へインタビュー調査を実施し、ルーラルツーリズムの推進組織の役割や実務、関連組織との連携のあり方を明らかにした。また、全県のアグリツーリズム農家へのアンケート調査を実施し、推進組織の支援を受けて活動を開始した農村住民への影響について明らかにした。研究方法は、ルーラルツーリズムにおける新たな理論である統合型ルーラルツーリズム（Saxena & Ilbery, 2008）を応用し、その特徴である、社会文化的背景（「埋め込み」）、持続性の視点から分析を行った。

2. 南チロルのルーラルツーリズム

1) 南チロルにおける観光業の強化

南チロルは、オーストリア、ドイツの統治を経て1919年にイタリア領となった。周辺国に翻弄された歴史的背景から、強い自治意識を持ち、かつては独立運動も起こって国連問題となった。こうした経緯から現在はイタリアの自治県となっている。南チロルは、東アルプス山脈の一部を形成するドロミテ山塊を南東部に有する。ドロミテ山塊は3,000mを超える山々が350以上も存在し、県境をなすトレント県やバレーノ県へ広がる。急峻な岩山の間に美しい湖や溪谷、多様な植物が広がり、かねてから世界中の登山者を魅了してきたが、1960年代、オーストリアでスキーがレジャーとして定着すると、オーストリア国境付近にスキー場が複数開発され、冬のスキー客も訪れるようになった。2009年には、ドロミテ山塊がユネスコの世界自然遺産に登録され、知名度は世界中に広まった。南チロルには、山岳部の観光資源の他に、中世からの温泉保養地であるメラーノ、2011年に世界文化遺産登録された北西部スイス国境地域のアルプス先史時代の家屋群、アイスマン博物館に加え、近年はサイクリング・乗馬等のアクティビティ、冬の市街で開催されるクリスマス・マーケット、春・秋のワイナリー巡りと多様化している。結果として観光客数は増加傾向で、年間観光客数はイタリア人2,563,150人、外国人4,739,214人の計7,302,364人となっている（2017年現在）。イタリア人より外国人観光客の方が多く、外国人観光客は、ドイツ67%、スイスとリヒテンシュタイン8%、オーストリア7%と続く。理由は、南チロル中心地のボルツァーノ駅までドイツのミュンヘンから鉄道で5時間、オーストリアのインスブルックから鉄道で2時間、スイスのサンモリッツから車で3時間という利便性に加え、ドイツ語が通じるイタリアとして、ドイツ語圏観光客が気軽に訪れることが可能な海外旅行先として認知されているためである。

2) ルーラルツーリズムの導入と発展

1950-1960年代のイタリアでは、農業収入の低下から都市への人口流出が拡大したが、南チロルでも同様だった。だが南チロルでは、農村住民はドイツ語を言語とする、南チロルの伝統と文化、アイデンティティを継承する重要な住民と認識されており、彼らが農村から流出することは自

治意識の高い南チロルでは問題視されるようになった。そこで、農業と観光業を結び付け、農村住民の収入を経済的に補い、農村コミュニティの崩壊を防ぐことを目的として、オーストリアで発展しつつあった「農村で休暇を (Unlaub auf den Bauernhof)」の導入の検討がなされた。その時、導入の支援を行った組織は、カトリック教会と南チロル農民連合であり、農村女性らが広報活動の支援を行った (Tommasini, 2013)。1960年代、南チロルの農家の多くは避暑目的で訪れる親類や知人を宿泊させる経験があった。その経験を活かし、快適な宿泊者専用部屋を1つ作れば現金収入を得ることができる、と広報活動がされ、南チロルの各農村に広まっていった。1973年、県法第42号が制定され、農場と周辺のインフラが整備された際に、宿泊客が快に過ごせるような最低限の道路、水道、電気といったインフラも整備された。

1985年、イタリアで国法第730号、通称アグリツーリズム法23)、が制定された。背景に、EEC (欧州経済共同体) に加盟していたイタリアでは、農業は激しい競争にさらされて採算が悪化し、農業の多機能化が不可欠だったことがある。アグリツーリズムは、農家が経営する宿泊等を伴う観光施設で、1965年にトスカナ州の元貴族により提唱され、イタリア中部で始まった。1973年には、南チロルに隣接するトレント自治県で、アグリツーリズムが条例化されるなど、各地での動きがあり、同調して第730号法が制定された。第730号法では、アグリツーリズムは農業収入の不足を補うものであり、観光収入が農業収入を上回らないことを基本指針とした。自治体へは、第730号法のもと、地域事情に合わせて法制定が義務化された。自治県の南チロルは国法第730号の基本指針を遵守する必要はなかったが、1985年以後は第730号法の内容を意識して法の改正や制定をした。第730号法制定を境に「農村で休暇を」としてきた名称もイタリア語の「アグリツーリズム (Agriturismo)」を併記した。

3) アグリツーリズム規定

南チロルでは、1996年に県法第32号が制定され、アグリツーリズムの規定がなされた。規模は、施設当たり6部屋までと制限され、農業と観光業が両立し、観光業が無秩序に拡大しないように規定した。2008年には県法第7号が制定され、アグリツーリズムを「農業起業家によるホスピタリティ活動」と定義し、その目的を「農業における多機能性の促進および所得格差の是正のための農業観光活動」とした。すなわち経営者には農業従事者しかならず、目的はあくまで農業収入の補完という点を明確にした。アグリツ

ーリズムの規定では、宿泊施設を伴い、部屋は6室、ベッドは10台までを基本とし、ベッド数が10台を超える場合は書面で申告した場合のみ、超過台数が認められる。農業規模は、果樹園や耕地は0.5ha以上、牧草地、放牧地は1ha以上の面積を有し、放牧地がある場合には必ず家畜を飼育することとしている。また、体験プログラムとして、農村らしい文化的・教育的な体験、スポーツのプログラムを宿泊者に提供する、食事には地元農産物を提供する、農場でテイastingなどの機会を設けることとしている。食事については細則があり、提供するものは80%が地域産品、30%は自家生産品としている。農産物、農産物加工品の販売や加工場は県内で行うとしている。また、伝統的な南チロル製品のリストが定められており、食事にはこれらを積極的に使用することが求められている。さらに、アグリツーリズム開業時には、運営者登録を行った上で、教育・訓練プログラムを85時間受講しなければならない。このプログラムは農業や家政学の専門職業訓練学校の課程に組み込まれている。運営者は経営者の他に手伝いの家族も含まれ、その場合は研修時間が19時間まで免除される。アグリツーリズム開業後の2年間のうちに受講されない場合、県はアグリツーリズム運営を停止することが可能となっている。

3. ルーラルツーリズムの推進組織

1) 南チロル農民連合とルーター・ハン

南チロルのルーラルツーリズムは、1998年以降に飛躍的に発展した。1999年と2011年を比較すると、アグリツーリズムの来訪者数は2.8倍の301,302人、宿泊日数は1.5倍の2,021,734日となった。背景には、1999年に南チロル農民連合傘下に発足したルーラルツーリズム推進組織のルーター・ハン (Roter Hann) の存在がある。ルーター・ハンには南チロル農民連合傘下に設立したルーラルツーリズムのマーケティングを中心とする組織で、研究員6名、アシスタント10名 (2016年3月現在) により形成され、①アグリツーリズムの格付け、②生産物のプロモーション、③農家向けセミナー、④伝統的クラフト復興を活動の柱としている。アグリツーリズムの格付けは、観光客向けの冊子とウェブサイトに掲載される。宿泊施設の規模や内容、バリアフリー対応、乗馬などのスポーツ・アクティビティ、通信環境や農産物の種類など、約20点の項目について、観光客が宿泊施設選択の目安にできるよう公開し、最も良い評価をエーデルワイスの花5つとして掲載する。格付けの目的は観光客の利便性に加え、アグリツーリズム経営者によるサービス向上である。そのためルーター・ハンは、全

アグリツーリズムに約100問16枚の審査シートを渡し集計している。格付けはアグリツーリズムの義務ではなく、レーターのダウンも行われない。生産物のプロモーションは、1農家1農産物加工品の生産を支援し、加工品を観光客向けの冊子とウェブサイトで紹介している。施設、人材、資力からアグリツーリズムに参入できない農家も、農産物加工品を生産すればルーター・ハンを通してプロモーションされるので、立寄り観光客への販売が可能になる。農家向けセミナーは、観光業の経験が無い農家に対し、ルーター・ハンの研究員や外部講師が行うもので、メニューはアグリツーリズムの経営方法・改修ノウハウ、農産物加工品の開発方法など多岐に亘り、期間は1日当り3～7時間で3日間から4ヶ月で行われる。参加費はルーター・ハンが大部分負担し、農家は低料金での参加が可能となっており、農家が円滑にアグリツーリズムに参入できる支援体制を整えている。近年は、伝統的な工芸品であるクラフトの復興に注力し、観光客向けに土産品として生産、宣伝するのみでなく、生産を核にした農村コミュニティの維持も目指している。ルーター・ハンの財源は農家からの広告収入と県からの補助であり、これで従業員の人件費も賄う。広告収入は、農家がアグリツーリズム、レストラン、土産品、伝統的クラフトを冊子やウェブサイトで宣伝する際の掲載料である。こうした仕組みはオーストリアで採用される形式で、影響を強く受けていることがわかる。

2) 南チロル農村女性協会

南チロルでは自治権を獲得した1972年以降、主産業である農業を強化し、同時に農村女性の地位向上が進められ、かねてから社会の活動に積極的な女性が多く存在した。1981年には農村女性の社会および職業生活の地位向上を目的に南チロル農村女性連盟が設立された。この組織の設立には兼業により地域外へ女性が一定期間出て行ってしまうのではなく、副業を推進することで女性が農村で継続的に暮らせるようにと言う考え方が背景にあった。組織の目的は設立当初と大きく変わりはないが、現在はより「農村女性の定着」に焦点を当てるようになっている。設立当初の南チロル農村女性協会は任意団体であったが、1981年には南チロル農民連合が傘下組織としたため、活動の幅や認知度が向上した。

南チロル農村女性連盟の活動は、1985年には「農村女性の日」が創設され未亡人を讃えることに始まり、1998年には州議会議員として農村女性を1名、2009年には2名当選させることに成功し、農村女性の社会的発言力を拡大させた。2004年に正式な州の非営利組織として登録されると、

活動がさらに活発化した。その内容としては、2007年に「農村での子育て」と題して農村女性の利用可能な保育施設を設置し、2008年に「農村女性賞」として農村で副業などにおいて最も活躍した女性への表彰の機会を設け、2013年には「私達の手から」と題して農村女性のアグリツーリズムや農村をフィールドにした体験プログラムを一覧化してプロモーションを開始した。さらに2014年にアグリツーリズムや農村を拠点にして小学生に農村生活の理解を進める「農場の学校」を開設、2016年には農村男性との婚約予備軍である若い女性向けに農村女性の生活の理解を進める「農村女性の学校」を開始した。現在の南チロル農村女性連盟の加盟者数は15,960名とイタリア最大であり、組織は6つの地域と傘下の154のグループで形成され、実際の活動の単位はこのグループである。各グループは定期的に農村女性のみで集まり、コーヒーを飲みながらおしゃべりをしたり、郷土料理を作ったり、趣味のドライフラワー作りやクラフトやトールペインティングなどを教え合ったりする。また、3月に開催される定期総会で全員が纏う伝統衣装を補修したり、当年の農村女性賞の候補者を予測したりする。こうした集まりで農村女性間のコミュニケーションが図られ、交流を通して農村女性の得意分野がわかれば、それを支部長クラスで集約し、「私達の手から」のメニューとして加えて行く。そして「私達の手から」に加えられたメニューは観光客向けの体験プログラムとして販売される。

3) 南チロル観光協会とアルペン協会

南チロル観光協会は、当初は県組織だったが、南チロル商工会議所（Innovation Development Marketing Südtirol, IDM）内に移管され、現在は南チロル全域の観光におけるプロモーション、パンフレットの作成、イベントの主催などを行っている。南チロル観光の玄関口になるボルツァーノ駅周辺に大型観光案内所を設け、各地域の小型観光案内所を取りまとめている。南チロルの観光で特徴的なのは、交通の利便性が優れている点である。イタリアではミラノ、ローマ、ナポリといった大都市でさえ、公共交通の遅延、地図の誤記、タクシー運転手による不当な料金請求などが発生し、観光客の気持ちを暗くさせることが多い。一方南チロルでは、バスの遅延は少なく、地図や時刻表が細かく正確で、タクシー料金は区間表示やメーター使用がされて明朗である。さらに登山道やハイキングコースには狭い間隔で行先表示の看板があり、到着地までの時間が正確に記載され、どの看板も比較的新しいものが建てられている。観光客が市街地のみならず山間部に至るまで移動がしやすい工夫がされており、ある意味でイタリアらしさが全くな

いと言って良い。山間部のハイキングルートが多くは、現在の農村住民の生活道でもある。車は通ることにはできないが、馬で通ることは可能であり、隣村まで行くのには本数の少ないバスを待つよりフットパスを歩く方が早いこともある。こうしたことから、近隣の農村住民が時折歩いてはフットパスの状況を常に確認している。またフットパスに置かれているベンチは南チロール観光協会が整備し、雪解けや雨の後の倒木の対応などは南チロール・アルペン協会が行っている。南チロール観光協会へのインタビュー（2016年3月実施）によれば、かつてフットパスは十分な整備がされていなかったが、外国人観光客の6割を占めるドイツ人観光客からのコメントを受けて少しずつ改良を重ねた結果、現状のようになったとのことである。

4. 考察

南チロールのルーラルツーリズムは、南チロール農民連合の傘下に推進組織としてルーター・ハンが設立されてから著しく発展した。そしてルーター・ハンのルーラルツーリズム推進組織としての成功は、南チロール農村女性協会、南チロール観光協会、アルペン協会、農業・家政系専門学校、県内大学など多様な組織と連携することで、単体ではなし得なかった、アグリツーリズムの格付け、農産物加工販売の促進、アグリツーリズム運営に関するセミナー、体験プログラムの集約と提供、フットパスの整備、パンフレットやホームページ、広域での情報発信などを可能にすることで成し遂げられた（図1）。

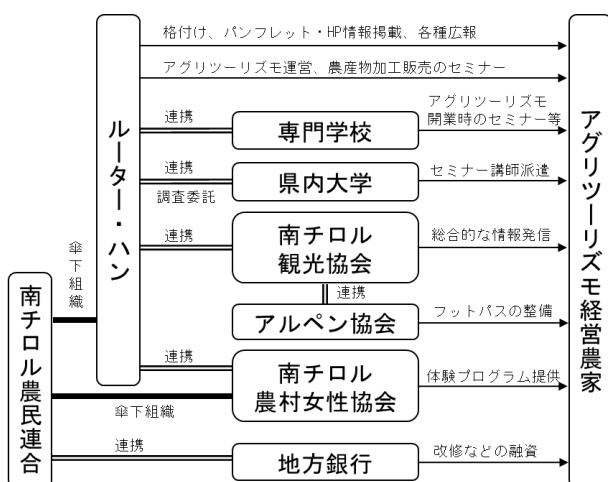


図1 ルーラルツーリズム推進組織のルーター・ハンが行った組織間連携

ルーター・ハンのような小さな組織が、多様な組織との連

携を容易に進められた背景には、南チロール農民連合の存在が大きい。南チロール農民連合は、農村住民の生活および社会的地域の向上を目的として1916年に設立された組織である。南チロール農民連合は、周辺国の統治に翻弄され独立運動も起きた南チロールの歴史において、常に農村住民に寄り合い南チロールのアイデンティティを持続しようとしてきた経緯から、現在は農村住民が最も信頼する組織となった。南チロールのルーラルツーリズムは、農村住民が最も信頼する組織の旗振りのもと成功しており、これは南チロールの社会・文化的背景、さらにはその根本にある高い自治意識が大きく影響していると言える。南チロールにおける高い自治意識は、地域産業の強化という政策にも現れており、ルーラルツーリズムの成功が地域の自治の強化にもつながると考えられている点にこそ、南チロールのルーラルツーリズムを内発的に持続させる最大の強みがあると言えよう。

5. 結論

南チロールでは、ルーラルツーリズム推進組織であるルーター・ハンが核となり、多様な組織と連携しネットワークを構築することで、ルーラルツーリズムを促進する強固な体制が構築された。こうした連携が円滑に行われる背景には、南チロールの歴史的背景から生まれた強い自治意識があり、国を頼ることなく県内の産業を強化し農村を維持しようとする思いがある。こうした強い思いが小規模自治体間のしがらみを超えて県全体のまとまりを構築し、南チロール農民連合や傘下組織による統一的なルーラルツーリズム推進体制を生み出すこととなった。ルーラルツーリズムの成功が推進組織であり、その動機が自治意識の高さにある点は、日本としても学ぶべき点が多いと考える。

【補注】

本論は科研費（農村の観光産業化における住民幸福度の変化に関する日伊比較研究（17K02128））の支援を受けた。

【引用・参考文献】

Saxena, G. and Ilbery, B. (2008): Integrated rural tourism : A border case study. *Annals of Tourism Research*, No.35-1, pp.233-254

Tommasini, D. (2013): Rural tourism in South Tyrol (Dolomites, Italy): Community cohesion, local development and farmer's identity, *Proceedings of the Community Tourism Conference*, pp.134-140